

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

熊本県立教育センター 研究企画

1 研究主題について

(1) 研究の背景

平成28年12月21日に発表された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では、第2章「2030年の社会と子供たちの未来」の項「予測困難な時代に、一人一人が未来の創り手となる」にて、「自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である」と示している。また、平成29年3月公示の小学校学習指導要領の前文においても「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」とある。

これらのことから、未来を生きる子供たちには、自ら未来や社会を創り出していく資質・能力が求められていることが分かる。

そこで、県立教育センターでは、一人一人が「未来の創り手」となる学びを生み出す手法を明らかにすることで、これから求められる学びの在り方を研究することとした。

(2) 研究主題について

①「未来の創り手」について

「未来の創り手」の姿を前述の中央教育審議会答申を参考に「自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生を創ることができる姿」と設定した。

②「豊かな学び」について

児童生徒にとって「未来の創り手となる」資質・能力が身に付くための「豊かな学び」を、「自身の存在が認められることを土台とし、よりよい社会づくりや幸福な人生に向かう学び」として設定した。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

「豊かな学び」の姿並びにその学びを実現する手法を明らかにすることを通して、一人一人が「未来

の創り手」となる学びを創り出すことを目的とする。

(2) 研究方法

本研究は、3年計画の研究である。初年度は、研究主題に迫るために、研究の視点の設定、実践の分析を目指し、研究協力校を2校、研究協力員を22名委嘱し、小・中・高・特別支援の各校種の授業実践を通して、「豊かな学び」を検証することとした。2年次は、「豊かな学び」に関する実践の蓄積及び手法の精査を行い、3年次は、「豊かな学び」を実現する手法を明らかにする予定である。

「未来の創り手」に関する検証については、「未来の創り手」となるために必要な資質・能力とは何かを本センター所員で協議し、「成長の実感」について検証を図ることとした。研究協力員の所属する学校の児童生徒において、意識調査を2回実施し、数値の変化から変容を見取ることとした。

また、「豊かな学び」に関する意識調査及び記述内容の分析を行い、数値や、記述内容の出現回数の変化により変容を見取ることとした。

3 研究の視点について

「学校経営」「教科等教育」「情報活用」「特別支援教育」の立場から研究の視点を次のように設定し、研究主題に迫ることとした。

学校経営

学校教育目標の実現につながる資質・能力を育むカリキュラム・マネジメント

教科等教育

- ①「見方・考え方」に着目した問いの工夫
- ②学びを実感する振り返りの工夫

情報活用

- 情報活用能力の育成を目指す学習過程の工夫
- ①言語活動を充実させる ICT 活用
- ②情報活用に着目した学習活動の工夫
- ③学びを深め合う対話活動の工夫

特別支援教育

自身の成長や他者のよさに気付くための「振り返り」「対話活動」の工夫

各研究の視点の具体的な内容については、それぞれの「研究のまとめ」（別紙）を参照いただきたい。

4 検証結果と考察について

(1) 「未来の創り手」について

表1は、「未来の創り手」に関する変容を示したも

のである。「未来の創り手」となるための資質・能力として設定した「成長の実感」に関して、4件法の質問紙調査により変容を見取っていった。

表1 「未来の創り手」に関する変容
(4件法 質問紙調査より)

	質問項目	事前	事後
小学校	自分は、学校生活や学習を通して、自分自身が分かるようになった、できるようになったと思う。	3.39	3.38
	自分は、学校生活や学習を通して、周りの人が分かるようになっている、できるようになっていると思う。	3.48	3.59
	自分は、学校生活や学習を通して、周りの人から分かるようになっている、できるようになっていると認められていると思う。	2.83	2.96
	自分は学校生活や学習を通して、学んだことをもとに、自分自身が主体的になったと思う。	3.13	3.16
	自分は、周りの人が学校生活や学習を通して、学んだことをもとに、主体的になったと思う。	3.39	3.42
	質問項目	事前	事後
中学校	自分は、学校生活や学習を通して、自分自身が分かるようになった、できるようになったと思う。	3.26	3.29
	自分は、学校生活や学習を通して、周りの人が分かるようになっている、できるようになっていると思う。	3.29	3.38
	自分は、学校生活や学習を通して、周りの人から分かるようになっている、できるようになっていると認められていると思う。	2.86	2.98
	自分は学校生活や学習を通して、学んだことをもとに、自分自身が主体的になったと思う。	2.95	3.07
	自分は、周りの人が学校生活や学習を通して、学んだことをもとに、主体的になったと思う。	3.04	3.23
	質問項目	事前	事後
高等学校	自分は、学校生活や学習を通して、自分自身が分かるようになった、できるようになったと思う。	3.00	3.12
	自分は、学校生活や学習を通して、周りの人が分かるようになっている、できるようになっていると思う。	3.11	3.34
	自分は、学校生活や学習を通して、周りの人から分かるようになっている、できるようになっていると認められていると思う。	2.63	2.78
	自分は学校生活や学習を通して、学んだことをもとに、自分自身が主体的になったと思う。	2.73	2.84
	自分は、周りの人が学校生活や学習を通して、学んだことをもとに、主体的になったと思う。	2.86	3.06
	質問	事前	事後
特別支援学校	自分は、学校生活や学習を通して、自分自身が分かるようになった、できるようになったと思う。	2.78	3.33
	自分は、学校生活や学習を通して、周りの人が分かるようになっている、できるようになっていると思う。	3.63	3.33
	自分は、学校生活や学習を通して、周りの人から分かるようになっている、できるようになっていると認められていると思う。	2.33	2.78
	自分は学校生活や学習を通して、学んだことをもとに、自分自身が主体的になったと思う。	2.56	2.78
	自分は、周りの人が学校生活や学習を通して、学んだことをもとに、主体的になったと思う。	2.88	2.33

どの校種においても概ね変容が見られたことから、「分かるようになっている、できるようになってい

る」ことに関して意識が向上したことが分かる。自分自身がそう感じているだけでなく、周りの人から認められることに関しても向上していることから、本実践は、「成長の実感」に関して有効であったと考える。

しかし、質問項目を相対的に見取ると、「周りの人」から認められていることに関してどの校種でも数値が低い。この数値が向上すれば、成長の実感をより強く意識できるのではないかと思われる。

(2) 「豊かな学び」について

各研究の立場から「豊かな学び」についての成果は、以下のとおりである。

学校経営

学校教育目標の意識化を図り、教育課程に基づいたPDCAサイクルを確立するカリキュラム・マネジメントは、教育活動の質の向上につながるとともに、学校経営を効果的にマネジメントすることに有効であった。

教科等教育

子供たちにとって「見方・考え方」に着目した問いは、学習活動が明確になるだけでなく、新たな課題を発見するなど、次の学習へのつながりを意識することにより有効であった。

学習過程を振り返ることは、自身の「分からない」状態からの変容を自覚することにつながり、学習後、成長を実感することに有効であった。また、教師からの的確な学びの価値付けは、成長の実感をより強めることが分かった。

情報活用

情報活用に着目した学習活動や言語活動を充実させるICT活用などを取り入れた学習過程の工夫は、考えを深めたり分かりやすく伝えたりするうえで有効であった。

特別支援教育

何を振り返るかを意識できるようにして、表現する活動を行うことは、考えをまとめたり、自他の成長を確認したりするうえで有効であった。

「教科等教育」の研究協力員の所属する学級において、「豊かな学び」に関する調査を行い、その変容を示したものが、表2である。どの校種においても

変容が大きかったことから、本実践は「豊かな学び」に関しても有効であったと考える。特に、質問項目を相対的に見たとき「未来の創り手」に関連した「分かるようになった」や「できるようになった」についての数値が一番高い。このことは、「豊かな学び」の学習過程において、どの場面が数値に影響しているのかを今後見取っていくことで、本実践をより確かなものにすることができるのではないかと考える。

表2 「豊かな学び」に関する変容
(4件法 質問紙調査より)

	質問項目	前	後
小学校	(教科等の) 学習のとき、見方・考え方を働かせながら問題を解決しようとしている。	3.25	3.49
	(教科等の) 学習のとき、様々な解決方法を試しながら、問題を解決しようとしている。	3.16	3.41
	(教科等の) 学習のとき、一人一人ができることを生かしながら、友達や先生と一緒に問題を解決しようとしている。	3.29	3.50
	(教科等の) 授業のとき、「分かるようになった」や「できるようになった」と感じる。	3.35	3.57
	これまでに学んだことを生かして(教科等の) 学習に取り組んでいる。	3.32	3.50
	(教科等の) 学習で学んだことをこれからの学習や生活に生かそうとしている。	3.35	3.51
	質問項目	前	後
中学校	(教科等の) 学習のとき、見方・考え方を働かせながら問題を解決しようとしている。	2.93	3.27
	(教科等の) 学習のとき、様々な解決方法を試しながら、問題を解決しようとしている。	2.94	3.23
	(教科等の) 学習のとき、一人一人ができることを生かしながら、友達や先生と一緒に問題を解決しようとしている。	3.10	3.39
	(教科等の) 授業のとき、「分かるようになった」や「できるようになった」と感じる。	3.23	3.43
	これまでに学んだことを生かして(教科等の) 学習に取り組んでいる。	2.95	3.19
	(教科等の) 学習で学んだことをこれからの学習や生活に生かそうとしている。	3.05	3.25
	質問項目	前	後
高等学校	(教科等の) 学習のとき、見方・考え方を働かせながら問題を解決しようとしている。	2.68	3.13
	(教科等の) 学習のとき、様々な解決方法を試しながら、問題を解決しようとしている。	2.58	3.02
	(教科等の) 学習のとき、一人一人ができることを生かしながら、友達や先生と一緒に問題を解決しようとしている。	2.85	3.25
	(教科等の) 授業のとき、「分かるようになった」や「できるようになった」と感じる。	2.99	3.31
	これまでに学んだことを生かして(教科等の) 学習に取り組んでいる。	2.85	3.25
	(教科等の) 学習で学んだことをこれからの学習や生活に生かそうとしている。	2.83	3.22

5 今後の展望について

今年度は、「学校経営」「教科等教育」「情報活用」「特別支援教育」のそれぞれにおいて、研究の視点に沿った検証を行った。今年度の成果を受け、教科等横断的な単元の設定等を行い、教育的効果が高まる実践の蓄積を行うこととする。特に、「学び」とそれを支える「学校経営」におけるカリキュラム・マネジメントとの関連を図り、検証していくこととする。

また、「未来の創り手」に関する資質・能力として「成長の実感」を設定した。次年度は、更に協議を重ね、「未来の創り手」に関する資質・能力とは何かを明らかにする。

これらを通して、研究テーマである「一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造」に迫ることとする。

《引用・参考文献》

- ・文部科学省(2017)『小学校学習指導要領』
- ・中央教育審議会答申(2016)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』